『ハリー・ポッターと賢者の石』における技術者倫理
—錬金術師・ニコラス・フラメルをめぐって—

Engineering Ethics in *Harry Potter and the Philosopher's Stone*
— Over the Alchemist Nicolas Flamel —

笠井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（2009年９月17日受理）

The purpose of this paper is to consider thought to know his engineering ethics over Nicholas Flamel drawn with *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. In *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Harry who entered the magic school notices existence of the philosopher's stone hidden somewhere. It is said that only two people of principal and alchemist Nicholas Flamel know the secret. Flamel destroyed the philosopher's stone which it became with a fight. He accomplished the engineering ethics.

Key words: alchemist, Nicholas Flamel, philosopher's stone, engineering ethics

1.　はじめに—「哲学者の石」—

『ハリー・ポッターと賢者の石』[1]は、イギリスの児童文学作家 J. K. ローリングが1997年に発表した、子ども向けファンタジー小説「ハリー・ポッターシリーズ」の第一巻である。

無名の新人の初作にも関わらず、瞬く間に世界的ベストセラーになった。子どものみならず、多数の大人にも愛読され、児童文学の枠を超えた人気作品として世界的な社会現象になった。すなわち、

> ハリー・ポッターの物語に関する読書現象はカルトに近い[2]。

といわれるほどである。1997年の「カーネギー賞」佳作に選出された他、数々の賞を受賞した。また2001年には、映画化されている。

この『ハリー・ポッターと賢者の石』（以下『賢者の石』と略す）には、現代の「技術者倫理」にも通じる思想が見られる。本稿の目的は、『賢者の石』で描かれるニコラス・フラメルをめぐって、彼の「技術者倫理」にも通じる思想について考察することである。フラメルは、作品中に姿は見せないが重要な役割を果たす実在した錬金術師であった。

2.　『賢者の石』のあらましとハイライトシーン

まず、『賢者の石』のあらましを見ておきたい。

額に稲妻型の傷のあるハリー・ポッターは、10歳の男の子である。彼は幼いときに両親を亡くし、いじわるな親戚ダーズリー家に引き取られて、物置で暮らしていた。つまらない毎日を過ごす、ハリーのもとに不思議な手紙が届くようになる。それは魔法学校「ホグワーツ」からの入学許可証であった。

11歳の誕生日に、ハリーのもとにホグワーツからの使者ハグリットがやってきた。彼の話により、初めて自分が何者か知らされることになった。何とハリーは魔法使いなのであった。

魔法の勉強をするため、ハリーはホグワーツに入学する。学校には四つの寮があり、ハリーはグリフィンドール寮に組分けされた。この寮で赤毛のロンや優等生のハーマイオニーと親友になる。ハリーは、新しいことでいっぱいの魔法学校の生活を送る。彼は、クィディッチという、魔法界の人気スポーツで大活躍するなど、学生生活にも慣れて行った。ハリーにとってホグワーツは、次第に自分の家となって行くのであった。

ある日、ハリーたちは、大きな三つの頭を持つ凶暴

な「三頭犬」に守られている「賢者の石」の存在を知る。持つ者に永遠の命を与えるこの石を、闇の魔法使いヴォルデモートが狙っていた。ハリーたちは、ホグワーツの教授たちによる石の守りに対して、挑むことになる。

ハリーとハーマイオニー、ロンの三人は力を合わせて、次々と石の守りを突破した。最後の関門に内気な教師クィレルがいた。実はクィレルは、ヴォルデモートに寄生されていたのであった。

最後の守りは、覗いた人間の心の奥にある望みを映すという「みぞの鏡」である。「石を使いたい」ではなく「石を守りたい」という望みを持って、鏡の前に立ったハリーのポケットに「賢者の石」が滑り込んできた。すると、クィレルに寄生したヴォルデモートが、石を奪おうとハリーに襲い掛かった。

意識を失ったハリーが目覚めると、そこはホグワーツの医務室であった。ダンブルドア校長は、ハリーに「賢者の石」は無事に守られ、ヴォルデモートは去ったと告げた。

ホグワーツの最初の一年が終わり、ハリーたちは新学期の再会を約束して、それぞれの家に戻った。

以上があらましである。次に、ハイライトシーンについて見ておくことにしたい。

ハリーとロンとハーマイオニーは、魔法学校のどこかに「賢者の石」が隠されていることに気づき始めた。ダンブルドア校長と「ニコラス・フラメル」なる人物だけがその秘密を知っているという。早速ハリーたちは、「賢者の石」に関する書物を探し出す。『賢者の石』には、次のように書かれている。

> ネビルが行ってしまってから、ハリーは「有名魔法使いカード」を眺めた。
>
> 「またダンブルドアだ。僕が初めて見たカード」
>
> ハリーは息をのんだ。カードの裏を食い入るように見つめ、そしてロンとハーマイオニーの顔を見た。
>
> 「見つけたぞ！」
>
> ハリーがささやいた。
>
> 「フラメルを見つけた！　どっかで名前を見たことがあるって言ったよね。ホグワーツに来る汽車の中で見たんだ……聞いて……『ダンブルドア教授は特に、一九四五年、闇の魔法使い、グリンデルバルドを破ったこと、ドラゴンの血液の十二種類の利用法の発見、パートナーであるニコラス・フラメルとの錬金術の共同研究などで有名』」[3]

これを聞いて、ハーマイオニーは跳び上がった。興奮した彼女は、女子寮への階段を駆け上がり、巨大な古い本を抱えて戻ってきたという。

> 錬金術とは、『賢者の石』といわれる恐るべき力をもつ伝説の物質を創造することに関わる古代の学問であった。この『賢者の石』は、いかなる金属をも黄金に変える力があり、また不老不死になる『命の水』の源でもある。
>
> 『賢者の石』については何世紀にもわたって多くの報告がなされてきたが、現存する唯一の石は著名な錬金術師であり、オペラ愛好家でもあるニコラス・フラメル氏が所有している。フラメル氏は昨年六六五歳の誕生日を迎え、デボン州でペレネレ夫人（六五八歳）と静かに暮らしている[4]。

ここまで読んで、ハーマイオニーが次のようにいったという。

> 「ねっ？　あの犬はフラメルの『賢者の石』を守っているに違いないわ！」[5]

その晩、ハリーたちは森の番人のところへ「賢者の石」のことを聞き出しに行く。この後場面は急展開して行くのである。

ターニング・ポイントとなった上の場面のキーワードは、「賢者の石」と「不老不死」と「錬金術師・ニコラス・フラメル」である。「賢者の石」は、「世界霊魂を凝縮したもの」[6]であって、philosopher's stone と呼ばれていた。つまり「哲学者の石」である。かつて、錬金術師と呼ばれていた技術者たちは、哲学者なのであった。

3. 錬金術の目的と起源

技術の世界が、次々分化していったのに対して、哲学は、世界を見つめるために一つの視点を探し出そうとする営みであった。現代社会において、技術と哲学が目指している方向には大きな隔たりがある。しかし、かつて技術と哲学が、同じ方向を目指していたときもあった。それは錬金術という形で、ヨーロッパにもアラビアにも中国にも存在した。錬金術の歴史は古く、

> 彼らの術はアダムにまで遡る、あるいはもっと昔にまで遡る[7]

のであり、また、

> 天地創造そのものが、錬金術の分離という聖なる行為[8]

であるといわれている。

錬金術師たちが行ったのは、実験器具を用いた作業である。そのような作業を通じて、世界全体を成り立たせている、創造の原理を明らかにしようとした。彼らは、現象の背後にあるものを探究することによって、世界の構造をまるごと説明しようと試みたのである。

では一体、錬金術とは何であろうか。

それは、卑金属を貴金属に変えることであるという。つまり、鉄くずを煮たり焼いたりして黄金に変えようというのである。それだけではない。「不老不死」の万能薬を作り出すことでもある。老いもせず死にもしない身体を獲得したいというのである。

では、なぜ黄金造りと不老不死が結びつくのであろうか。

鉄はやがて錆びる。銀は表面がくもってくる。しかし、金は変化しない。私たちの身体は、勿論変化する。成長し老化し、いつかは死を迎える。そうであるならば、変化しない金を身体に取り込むことで、変化しない身体を実現することはできないものであろうか。

金を服用するだけなら、簡単である。塊のまま飲み込んでも、のどに詰らなければ胃まで落ちて行く。金箔入りのお酒のように、薄くして液体と一緒に流し込めばもっと容易である。ただし、人間の内臓は金属を一切消化吸収しない。これを、何とか消化吸収しようとした人々が世界中にいた。彼らは様々な物質に金を溶かし込んで服用し、身体に吸収させようと試みた。

したがって、金を獲得するといっても億万長者になろうというのではない。獲得した金によって「不老不死」の身体を得ること、それが錬金術の真の目的なのである。

元来、火を用いて金属を加工することから始まった冶金をなりわいとする人々は、火を使うがゆえに特殊な技術をもった集団と見なされた。さらに、特殊な技術であるがゆえに、師から弟子へと秘密裏に伝授される。そういう密やかな行為の過程で、金属変成や「不老不死」といった神秘の文字が加えられていったに違いない。

火を用いる仕事があり、その秘訣について心を許した者だけに伝えられる密室があり、そしてもっと長生きして人生を楽しみたい、という欲深い人間がいる限り、錬金術は如何なるところでも棲息可能である。そのような思い上がったことをしたがる人間は、理屈屋なので長生きだけでは満足せず、この世界の成り立ちまでも理解したいと考えた。これは、理屈屋の哲学者と目指すところが変わらない。

地中海世界における錬金術の始まりは、３世紀のアレクサンドリアが舞台であった。アレクサンドロス大王の東方遠征によって、ギリシアの文化がオリエント世界まで拡大した。東西の文化が融合した時代である。新興宗教も花盛りであった。ギリシアやエジプトやペルシアの神々が混ざり合って、奇抜な神々もたくさん生まれたという。

ギリシア神話に出てくる伝令の神・ヘルメスとエジプトの学問の神・トートが一つになって、ヘルメス・トート神が誕生した。この神はやがて、「三倍も偉大なヘルメス」という意味で、ヘルメス・トリスメギストスと呼ばれ、錬金術の神様に祭り上げられた。金属変成の秘訣を伝えようという書物が、いくつも作られた。ヘルメス・トリスメギストスによって書かれたことになっており、まとめて「ヘルメス文書」と呼ばれている。

4. 正統派錬金術の形成

アレクサンドリアから始まった錬金術の伝統は、ヨーロッパでは一旦途絶えてしまうが、12世紀になって西ヨーロッパで再び盛んになる。

その頃、イスラム世界はヨーロッパとは比較にならないほど高度な文化を築いていた。イスラム教徒たちは、本家のヨーロッパで忘れられてしまった古代ギリシア哲学や科学に目を向け、彼らのもとに伝わった古い書物を、次々とアラビア語に翻訳した。

８世紀以降イスラム教徒に占領されていたイベリア半島では、アラビア文化が花盛りであった。その地で、アラビア語に翻訳された哲学書や科学書がさらにラテン語に翻訳されていった。ヘルメス文書も錬金術も、こうしてイスラム世界からヨーロッパにもたらされたのである。

英語で錬金術を alchemy という。もとは、中世ラテン語の alchimia である。頭の al- はアラビア語の定冠詞、chimia の語源については諸説がある。ギリシア語の「液体」がもとになった「混合液」のことであるとか、エジプトの古い呼び名である「黒い土」（肥沃な土地という意味）のことであるとか、中国語の「金液」（金丹を液状にしたもの）の古い音であるなどの諸説がある。結局確かなことは不明であるが、イスラム世界から伝えられたことだけは間違いない。

伝えられた先は、ヨーロッパの古い文化を細々と守り続けていた修道院である。錬金術とキリスト教との繋がりは、ここから始まった。

中世キリスト教神学の巨匠アルベルトゥス・マグヌス（1193頃～1280）は、錬金術を「偉大な技術」と認識し、様々な物質を分解して「原初の物質」を抽出する作業こそ、その出発点であるとした。これを精錬し、さらに変成させることで「エリキサ」（elixisa）が得られるという。後に、個体では「賢者の石」と呼ばれ、液体では「不老不死の水」と呼ばれた物質である。

イスラエルからローマへとその中心地を移したキリスト教会において、紀元前４世紀のギリシアの哲人アリストテレスの宇宙観は、聖書に次ぐ真理とされた。人間の世界が、より高次の世界である天文の世界と結びつき、恒星や惑星の運行が人間と自然を支配するというアリストテレスの思想は、占星術に根拠を与えた。アリストテレスの著作に、膨大な注釈をつけたアルベルトゥスは、古代ギリシアの碩学の学説を検証するべく占星術を実践した。

キリスト教神学の神秘主義と、アリストテレス哲学の理性主義を結合したスコラ哲学を大成し、『神学大全』を著したトマス・アクィナス（1225～1274）は、彼の愛弟子である。実践を何よりも重んずる彼は、同輩たちが忌み嫌う様々な秘術を積極的に試し、宝石や鉱物の魔術的特性を詳細にまとめた『鉱物論』において、錬金術の実験を試みたものの、銀に似たものしか作れなかったと述べている[9]。

錬金術の素材となる砒素や白鉛、カリウムについての様々な発見や、薬草や植物についての詳細な研究は彼に魔術師というレッテルを与えている。興味深いことに彼自身、『錬金術師』という著作で、隠秘学を実践する者はその仕事を世間に対して、隠さねばならないと、彼らに助言するような文章を書いている。

アルベルトゥスの著作は、神学・哲学・自然学・医学に及んでいる。イスラム世界を含めて、その頃知られていた、あらゆる学問を百科全書のように総括するスケールであった。錬金術も、その壮大な知の営みの中に位置づけられる。

さて、錬金術における最大の目標であり、多くの錬金術師たちが夢見た「賢者の石」について、少し補足しておきたい。そもそも、錬金術師たちの多くは、すべての物質が硫黄と水銀によって構成されている、と考えていた。そうなれば必然的に「賢者の石」も、硫黄と水銀によってできていることになる。

しかし、ここでいう硫黄と水銀は、現実にある硫黄と水銀とは微妙に違うものである。いわば、観念的な意味での、純粋存在としての硫黄と水銀のことであった。そこで、「賢者の石」の材料として一番よく使われたのは、金と銀である。なぜなら、金と銀は金属の中でも、純度が高いものとされていたため、純粋存在としての硫黄と水銀を、抽出しやすいと考えられたのである。

結局、「賢者の石」の存在は、16世紀スイスのパラケルスス（1493～1541）や次に述べるニコラス・フラメルといった傑出した錬金術師たちが、所持していたと伝説の中で語られるのみで、実際に人々の目の前に現れることはなかった。それでも、多くの錬金術師たちは、この究極の物質を作り出すことを夢見続けた。その試行錯誤の歴史こそ、錬金術の歴史であるといえよう。

5. 異端的錬金術の展開
—ニコラス・フラメルの神話—

錬金術が西ヨーロッパへ伝わってから、二百年も経つと、修道院の塀の外へも広まって行き、錬金術の世俗化が始まったという。その時代に登場したのが、ニコラス・フラメルである。

フラメルは1330年頃生まれ、パリ大学御用達の写本屋を営んだ。仕事は順調であったらしく、写本の装丁や販売にも手を広げ、晩年には教会に多額の寄付をしたという。1418年に九十歳近い生涯を閉じ、遺骸はパリのイノサン墓地に葬られた。

とりたてて言うことのない生涯であったが、多額の寄付をしたことが人目を引いたらしい。亡くなってしばらくしてから、奇妙な話ができあがった。

フラメルがパリで開業したての頃、店に現れたユダヤ人から、錬金術の奥義が描かれている図を手に入れた。それから何十年か経ってこれを読み解き、金属変成の秘術を習得したというのである。そうして作り出した莫大な金の一部を、寄付に回したと後世の人々は想像した。

フラメルは、ことの一部始終をラテン語の自伝に書き記したという。そのフランス語訳は残っているけれども、原本は失われたことになっている。つまり、

原典となるべきいかなる手稿本も存在しない[10]

のである。これは、不確かな話である。フラメルとい

う人物が存在したことは記録からも知られる。しかし錬金術師としての彼に関するエピソードは、ヘルメス神のように、後世の錬金術師たちが作り上げた神話的な人物像であるといえる。

では具体的には、どのようにしてフラメルは黄金を作りだしたのであろうか。スペインから帰国後の数年間、さらなる研究を進めていたフラメルは、すでに黄金生成の一歩手前の物質までは、作り出していたという。後は、黄金生成の最後のカギであり、錬金術師たちの究極の夢である「賢者の石」を作り上げるだけであった。

そして1382年、ニコラス・フラメルは、妻の見ている前で、長年の研究の結果生み出した物質をフラスコの中に入れ、熱し始めた。すると、物質はその色を灰色から黒に変え、さらに少しずつ白に変化して行き、最後には完全な白い物質に変化した。そこで、フラメルが溶かした半ポンドの鉛に、この白い物質を混ぜてみると、鉛は同量の純粋な銀に変化したという。

白い物質は、卑金属を銀に変える「賢者の石」なのであった。しかし、彼はまだ実験をやめなかった。銀を変成する「賢者の石」をさらにフラスコで熱して行くと、石は白から虹色、さらに黄色、オレンジ色、紫色と変化して行き、最終的には赤色へと変わっていったという。

この赤い石こそ、「賢者の石」の中でも最高位にあるといわれるものであった。ニコラス・フラメルが半ポンドの水銀に、赤い「賢者の石」を入れると、今度は水銀が同量の黄金に変化したそうである。

以後、フラメルは、この実験も含めて３回ほど黄金生成の実験を行なったと言い伝えられている。しかし、それ以上は黄金を作ることをしなかった。必要以上の欲を持つことが、己を滅ぼすということを知っていたのであろう。

また、ニコラス・フラメルと彼の妻が「賢者の石」のよって永遠の生命を得て、今もどこかで生きているという伝説も存在している。「賢者の石」には、そのような力があると信じられているのである。一説には、「賢者の石」を持っていることが権力者や世間に知られ、迫害されることを恐れたフラメル夫妻は、とりあえず自分たちが死んだことにして葬儀も出して、そのことで、周囲からの追求を逃れようとしたともいわれている。

果たして、フラメルは本物の錬金術師であったのであろうか。真偽のほどは定かではないが、現代においても錬金術師を志す者にとって、彼が憧れと崇拝の対象であり続けていることだけは、疑いようのないことである。

フラメルの生まれる少し前に、ローマ教皇庁から錬金術の禁止令が出ている。フラメルが亡くなって少し後に、今度はフランス国王による禁止令がでた。錬金術が世間に広まったことで、怪しげな贋金づくりがたくさん現れたからであろう。

幾度もの禁止令にも関わらす、錬金術はずっと生き続けて行く。教会きっての神学者たちが公然と錬金術を取り上げたのは、もはや過去のことである。それから後は、徐々に秘密のベールにつつまれて行った。フラメルの神話は、その先駆けといってもよいであろう。

神話の世界のことではあるが、フラメルは真理探究のため思索を重ね、実験によって神の創造の領域にまで到達した。現代では当たり前になってしまったが、哲学とは言葉による営みである。しかし、言葉によらない哲学の営みもある。錬金術師は、実験によって思索した哲学者ということになるであろう。

錬金術師ニコラス・フラメルは、金属工学を極めた技術者であった。そして真理を求めて哲学する技術者でもあった。

> 17世紀末に、土台となる理論がより妥当な現代科学のそれにとってかわるまで、錬金術は非常にまじめな仕事でした。錬金術師たちはめざす目標が不可能とは自覚してなかったものの、化学と医学の両方に役立つ重要な化学薬品をたくさん発見しました[11]。

やがて、錬金術は哲学と分離してしまうのである。工学の始まりは、間近である。

6. 技術者の社会的責任—おわりにかえて—

技術者には、三つの社会的責任があるといわれている。それらは、

（１）技術を通じて社会の必要にこたえる責任
（２）技術のもたらす結果に対する責任
（３）技術およびそれがもたらす結果を一般の人にわかる言葉で説明する責任[12]

というものである。このうち（２）は、「作り出した人工物がもたらす結果に対する責任」と言い換えることができる。すなわち、人工物は、技術者本人の手から離れて、一般社会や一般人が使用することになる。

この点では「賢者の石」も、そういう人工物の一つであると見なされるといえる。

『賢者の石』のクライマックスシーンを、見ておきたい。

賢者の石を奪って、「不老不死」を得ようとしたヴォルデモートは、ハリーとの戦いに敗れた。気を失ったハリーが目を覚ますと、そこにはダンブルドア校長がいた。ハリーとダンブルドアは、次のような会話を交わしている。

「いや、『石』ではなくて、ハリー、大切なのは君じゃよ……君があそこまで頑張ったことで危うく死ぬところだった。一瞬、もうだめかと、わしは肝を冷やしたよ。『石』じゃがの、あれはもう壊してしまった」

「壊した？」ハリーは呆然とした。

「でも先生のお友達……ニコラス・フラメルは……」

「おお、ニコラスを知っているのかい？」

「君はずいぶんきちんと調べて、あのことに取り組んだんだね。わしはニコラスとおしゃべりしてな、こうするのが一番いいということになったんじゃ」

「でも、それじゃニコラスご夫妻は死んでしまうんじゃありませんか？」

「あの二人は、身辺をきちんと整理するのに十分な命の水を蓄えておる。それから、そうじゃ、二人は死ぬじゃろう」

ハリーの驚いた顔をみて、ダンブルドアがほほえんだ。

「君のように若い者にはわからんじゃろうが、ニコラスとペレネレにとって、死とは長い一日の終わりに眠りにつくようなものだ。結局、きちんと整理された心を持つ者にとっては、死は次の大いなる冒険に過ぎないのじゃ。よいか『石』はそんなにすばらしいものではないのじゃ。欲しいだけのお金と命だなんて！　大方の人間が何よりもまずこの二つを選んでしまうじゃろう……困ったことに、どういうわけか人間は、自らにとって最悪のものを欲しがるくせがあるようじゃ」[13)]

技術は、善と楽を社会にもたらすその能力を確実に増大させてきた。しかし、それは同時に悪と苦を作り出す能力の増大でもある、というのは疑いもない事実であろう。技術の能力そのものにおいて、善か悪か、楽か苦かを決定することは決してできない。

悪と苦を避けるために善と楽をも断念し、ある種の能力の使用を全面的に禁止するか。悪と苦をもたらすような使用のみを、それが可能だとして停止するか。それとも善と楽の名において、その能力への全面的な依存を続けて行くか。選択と決定は、そのような地平でなされなければならないはずである。

上の話の中で、ニコラス・フラメルは自分の命さえも惜しまずに、「賢者の石」を破壊するという全面的な禁止を選択した。彼は、技術者にとって一番大切なものは何かを考えて、技術者としてどうあるべきかを決断したのである。それは、技術者としての「倫理」を全うしたことに他ならないといえよう。

文　献

1）引用は、J.K.ローリング：ハリー・ポッターと賢者の石，松岡佑子訳（静山社，1999）を使用し、頁数を記す。

2）小林矩子：ハリー・ポッターとその時代，p. 34（武蔵野大学出版会、2008）

3）『賢者の石』，pp. 318－319

4）同書，p. 320

5）同書，p. 321

6）アンドレーア・アロマティコ：錬金術，種村季弘監修，p. 70（創元社，1997）

7）ガレス・ロバーツ：錬金術大全，目羅公和訳，p. 11（東洋書林，1999）

8）同前。

9）アルベルトゥス・マグヌス：鉱物論，沓掛俊夫編訳，p. 134（朝倉書店，2004）

10）ナイジェル・ウィルキンズ：ニコラ・フラメル　錬金術師伝説，小池寿子訳，p. 158（白水社，2000）

11）アラン・ゾラ・クロンゼック，エリザベス・クロンゼック：ハリー・ポッターの魔法世界ガイド，和泉桃子訳，p. 71（早川書房，2001）

12）松木純也：基礎からの技術者倫理，p. 4（電気学会，2006）

13）『賢者の石』，pp. 437－438